

〔物語〕関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

第七節 『夜の宿』と小山内薫（第十三回公演）

大正十三年十月築地小劇場第十三回公演には、ゴオリキイの戯曲『夜の宿』（『どん底』）が組まれた。これこそ小山内薫が古くから深い関心を抱き、演出に努力を重ねた作品である。帝政露西亞の下層社会を題材として、全三幕が貧民窟の木賃宿で展開される。

ゴオリキイ作・小山内薫訳『夜の宿』 第三幕

家屋の間に狭まりたる明き地。ぼろ屑散らばり、雑草生い茂る。後景に高き煉瓦の防火壁あり、天を覆う。その下に接骨木の叢。上手に角材を組み合せたる暗色の壁、庭に建てたる付属家屋、納屋が厩の一部なるべし。下手に木賃宿の灰色の壁、そこここに漆喰僅に残りいる。・・・下手の角材にナタアシアとナスチャ列びて坐す。上段の板には、巡礼ルカと男爵。上手の壁の側なる角材の上には、錠前屋クレシチ坐す。低き方の窓より帽子屋ブノフ覗きいる。

ナスチャ （眼を閉じ、首にて話にタクトをとりつつ、唄うが如き調子にて物語る）それでその晩になるとその人が約束通り庭のあづまやへ来て下さる。あたしは、恐いのとかなしいので慄えながら長い間待っていたのよ。そのひとも、体中がぶるぶる慄えていて、顔にはもう血の気がない。でも、手にはピストルを持っていたのだよ。

ナスチャ （ひまわりの種を噛みいる）まあ、なんだって、学生さんてものは、みんな気違いだねえ。

ナスチャ そして、恐ろしい声をして言うには、わが最愛なる恋人よ。

帽子屋 は、は。「最愛なる」と言ったかい。

男爵 静かにしろ。黙って嘘をつかせろよ。聞きたくなきや聞くに及ばねえんだ。それからどうしたい。ナスチャ わが心の限り愛するものよ、わが黄金の宝よ、とその人が言うのだよ。僕の両親は僕が君と結婚することを許してくれない。そして、僕が君と手を切らなければ呪うと言っておどすのだ。だから僕は死ぬより外はない。こうその人は言うのだよ。その人のピストルは大変大きなので、玉が十も入っていたのだよ。さようなら、わが親愛なる心の友よ。僕の決心は曲げることができない。僕は君という者なしには、生きていられない、とその人はまた言うのだよ。そこで、あたしはこう返事をしたのだよ。忘れ難き友よ、ラウリよ。

帽子屋 （驚きて）なんだと。クラウルじゃねえか。

男爵 （笑う）ナスチャ、間違ったぜ。こないだはガストンで言ったぞ。

ナスチャ （飛び上る）お黙り、ごろつき、宿なし。一体お前達は恋というものがどんなものだか知ってるのかい。真実な、純潔な恋がどんなものか、あたしは、あたしはその純潔な恋を味わったのだよ。・・・ナスチャ あんな人達にお構いでないよ。一体あの人達はなんだい。焼けるからだよ。なんにも自分と話することがないからだよ。

ナスチャ (また座る) いや、もう話さない。みんながほんとうにしないで、笑うんなら。(突然詞を切り、二、三秒の間沈黙して、再び眼を閉じ、手にてまた話のタクトを取りつつ、声高に、口早に語り続ける。遠くに音楽聞こゆ。) それから、あたしはこう返事をしたのだよ。わが生の歓びなる君よ。わが光り輝く星よ。あたし、とてもあなたが無くては生きていられません。あたしは気ちがいのようにあなたを愛しています。この胸に心臓が鼓動を打っている限りは、いつまでも、いつまでも、愛しています。併し、あなたのお若い命を絶つことは、どうぞやめて下さい。なぜと言えば、なたの大事な御両親は、あなたを唯一の楽しみにしておいでなさるのです。御両親にとっては、あなたは無くてはならぬお方なのです。どうぞあたしを捨ててください。あたしはあなたを恋い焦れて、死んでしまった方が好いのです。あたしは寂しい。あたしは、独りぼっちです。どうかあたしを死なせてください。あたしが死んだって、なんでもありません。あたしはなんにも出来ないんですもの。あたしはなんにも取柄がないんですもの。ほんとに、なんにもないんですもの。(手にて顔を覆い、静かに泣く)

ナスタシヤ (ナスチャの側へ寄りて、静かに) 泣かなくても好いわ。

巡礼、笑いながらナスチャの頭を撫でる。

〔中略〕

ナスタシヤ あたしだって、いろんなことを考えてみるわ。考えてみて、待っているわ。

男爵 何をよ。

ナスタシヤ (困って笑う) それはねえ。まあ、こう思うのさ。あしたになるときと誰か来る。誰か知らない人が。でなければ、何かある。何か今まで無かったようなことがある。わたしは、もう随分永い間、

それを待っているのよ。今でも、まだ待っているわ。でも、結局、それがはっきり見える段になると、当てにしていた程大きなものじゃないかも知れない。

やや長き間。

男爵 (笑いながら) 当てにすることの出来るものが、一つだけであるものかな。少くともおれは、なんいも当てにしちゃいねえ。おれにとっちゃ、みんな一度づつあったことだ。みんな過去よ。結局なあ、それがどうした。

ナスタシヤ あたしは、また時々こんなことを考えるの。あした、あたしは不意に死んでしまうんじゃないかしら。するともう、恐ろしくてたまらなくなってくるの。夏になると、よく人は死ぬことを考えるわねえ。そら、夕方が来る。いつ、雷様に落ちて来られるか分かりやしないわ。

男爵 おめえの生活も楽しやねえな。姉がああいう悪魔だからな。

ナスタシヤ だあれも楽な生活をしている人はいわ。みんな苦しんでるわ。あたしの知ってるだけじゃあ。

①

① マキシム・ゴオリキイ作・小山内薫訳『夜の宿』(『世界戯曲全集』近代社、一九二六年。六〇六一
六〇八頁。)

マキシム・ゴオリキイ作・小山内薫訳『夜の宿』(『小山内薫全集』春陽堂、一九三一年。第四巻、二五八―
二六一頁。)

マキシム・ゴオリキイ作・小山内薫訳『夜の宿』四幕

第十三回公演 十月十四日―二十四日 毎夕六時

木賃宿主人	東屋三郎	ワシリイサ	室町歌江
ナスタシヤ	山本安英	メドウデフ	生方賢一郎
ワシカ・ベベル	千田是也	クレシチ	河原崎長十郎
男爵	汐見洋	ルカ	丸山定夫
アリヨシカ	小杉義男	アンナ	若宮美子
ナスチャ	花柳はるみ	クワシニヤ	吉野光枝
ブブノフ	藤輪和正	サチン	青山杉作
役者	友田恭助	ソオブ	竹内良作
鞭鞭人	洪海星	同宿人	伏見直江
演出	小山内薫	装置	溝口三郎
配光	岩村和雄	効果	和田清

①

① 水品春樹著『新劇去来―築地小劇場史（復元）その他』一二七頁。

ゴオリキイの戯曲『夜の宿』は日露戦争の以前、朝日新聞紙に『木賃宿』として連載され、これが最初の邦訳とされる。『木賃宿』を辿った森鷗外は、「黙阿弥の世話物を読むような心持ちがする」と語った。幕末における下層の男女と暗い世相を描いた共通性の指摘に小山内も共感する。自由劇場発足の前後には昇曙夢の訳で『奈落』とも『どん底』とも呼ばれたが、ドイツ語からの重訳を基本とする小山内訳では、ドイツ語訳に即し『夜の宿』と題された。①

築地小劇場における『夜の宿』演出は、有楽座での初演以来第五次にあたる公演であった。震災の前年に本郷座上演に際して小山内が述べる回顧には、翻訳や演出の労苦とともに歴代の配役も記録される。帝劇でなされた第二次を除き、女優は起用されていない。

小山内薫『夜の宿』の回顧」（『小山内薫全集』第六卷）

ゴオリキイの『夜の宿』を吾々が演出したのは、今度の本郷座が四度目である。―今度は二幕目を一幕見せただけであるが。

明治四三年に有楽座で二日間やったのが第一回。大正二年に帝国劇場で五日間やったのが第二回。大正四年に京都の南座で五日間やったのが第三回。これらはいずれも吾々の「小劇場」運動である「自由劇場」の名の下でやったので、普通の興行でやったのは、今度の本郷座が始めてである。・・・

① 小山内薫「ゴオリキイのについて」（『小山内薫全集』第六卷、五八一―六三頁）

木賃宿の主婦のワシリイサは、第一回から第三回までずっと秀調の持やくであった。それをこんど始めて松蔦にやらせて見たのである。ナタアシャは一回毎に役者が変わっている。第一回が松蔦、第二回がその当時帝劇の女優であった香川玉枝、第三回の京都が莚三で、今度の第四回が芝鶴である。ワシリイサの伯父の巡查も一回毎に変っている。第一回が鶴蔵、第二回が団右衛門、第三回が宗之助のころの故人になった門弟、今度の第四回が寿三郎である。今度出した二幕目には出ないが、この芝居で重大な役を勤めている人物の一つに、ナスチャと言う売春婦がいる。これは第一回に宗之助がやって、好評だった。第二回、第三回は表にもあるとおり松蔦が勤めている。・・・

台本の事から言うと、私の翻訳が露西亜語からの直接訳でないことは言うまでもない。私が始めてこの脚本に接したのは、明治三九、八年頃―私がまだ大學を出たか出ない時分に―本郷の古本屋でアウグスト・シヨルツの独逸訳を見つけた時だった。第一回の時の翻訳は勿論これを土台にしたものだった。その時私の助手になって下訳をしてくれたのが、やはり大學を出たか出ないかの和辻哲郎だった。今では日本および東洋文化史の一權威である、あの和辻哲郎である。私は和辻君の下訳をほとんど全部書き換えなければならなかった。和辻君の訳が間違っていたのではない。私が舞台の上に演出しようとする詞のリズムやニュアンスが、それに欠けていたからである。・・・

はじめてこの芝居をやった時は、往年の客気に駆られて、ただがむしゃらにやったというだけのことであつた。・・・併し、第二回目の時は、私がモスクワの美術座（芸術座）で本物を見て帰ったあとのことであ

つたから、少し誇張して言えば、面目一新で、なかなか第一回の時のような稽古の仕方ではなかった。①

『夜の宿』第一回公演を果たし、三十歳で中川登女子と結婚した小山内薫は、明治四五年十二月海外巡歴に出発した。モスクワでの滞在一カ月のうち、芸術座での観劇は十三回、とくに『どん底』は二回と『旅日記』に誌される。雪の大晦日芸術座でツルゲーネフの喜劇に接したあと、高名な演出家スタニスラフスキーの邸宅へ招かれ、同夫妻、チェホフ未亡人、名優モスクインと歓談した。② 貿易会社のモスクワ駐在員であった渡辺（東山）家に寄寓したのもこの旅である。

モスクワでの『どん底』（『小山内薫全集』第七巻）

大正元年十二月二九日私がモスコオへ着いた明るる日の明るる日である。通舟をつれてトレチャコフの画廊へいくついでに、美術座（芸術座）に寄って、いつのどの好いから切符を売ってくれと言うと、もうこの一週間の一枚もない。八日先のならあるが、それはあしたからでなければ売らないと言う。・・・がっかりして劇場を出ようとすると、カツサの女が優しい声で後から何か判らない事を言う。通じに聞かせると、「今夜のなら一枚あるが、今夜のは要らないか、」と言うのである。「幾らのです。」「六ルウブルのです。」

① 小山内薫「『夜の宿』の回顧」（同書、三六三―三六九頁。）

② 小山内富子著『小山内薫―近代演劇を拓く』一三二―一三五頁。

「宜しい、買いましょう。」私は出し物も聞かず、場席も聞かずに夢中で切符を買ってしまった。・・・気が落ちつくと、私はその晩の出しものが知りたくなって来た。・・・

しばらくカッサの窓でくどくどと何か聞いていた通辞は、やがて私の側へ寄って来て、「ナ・ドニエエです。ゴオリキの有名なものです。私も一度見ました。ナ・ドニエエ。そうです。この底の方で、言う意味でしょう」私は通辞の片言を我慢して聞いている事が出来なかった。『ナ・ドニエエ』。この一語を聞いた瞬間に私の身体はぶるぶるっと震えた。思いもかけない喜びが、電気のように私を襲って来たのです。・・・幕があいて、先ず私が意外に感じたのは、色である。衣装の色彩である。赤がある、桃色がある、橙黄がある。「露西亞」と言えば何でも灰色のように思っていた私の先入観念はとっさに破られてしまった。私は実際幕の上があった瞬間には「恐ろしく綺麗だなあ」と思った。併しながら、その感じは一瞬間だった。舞台に漲る強い色彩は、戯曲の進むにつれて、この地下室の生活を一際陰鬱にしてみせた。私は「赤」といういろにどの位陰鬱な感じが籠っているものかそれをこの芝居で知る事が出来た。・・・

ナスタシャの哀れに疲れた姿は最も私の心を引いた。京都の舞子に見るような、血の気の失せた、薄黄色い、蠟燭のような色をした顔。引き詰めにした貧しい髪の毛。体は終始疲れているようで、どこにでも寄り掛かる。何にでも肱を突く。ナスチャは極めて真面目である。センチメンタルな安小説に感動して、終始めそめそ泣いている。・・・

木賃宿の外の壁の一つに、屋根へ上られる鉄の梯子が掛かっている。(第三)幕があくと、男爵はシャツ一枚股引一つで、この鉄の梯子の二、三段上に腰かけている。ナスチャは地下室の窓の側の石段に腰をかけている。ナスタシャは大きな肩掛をしてその左に坐っている。巡礼は草鞋を繕いながら、その後には坐っている。

帽子屋は窓の外の地面へ、赤だの青だの黄だの色々な布を継ぎはぎした蒲団を敷いて、それに肱を突きながら、そのおどけた顔を窓の中から出している。ナスチャは一所懸命になって、小説の話と自分の身の上をゴツゴツに話している。①

築地小劇場における『夜の宿』公演では男優として汐見洋、青山杉作、丸山定夫、千田是也など有力な専属の総出のなかで、歌舞伎畑から河原崎長十郎が参じている。猿若町三座のひとつ、河原崎座座主の長男である彼は、父親の歿後不遇のなかで、新劇での訓練へと進んだ。後年長十郎と前衛的な〈前進座〉を結成する中村翫右衛門の自叙伝には、長十郎の経歴と新劇参加が記述される。

河原崎長十郎の新劇参加 『中村翫右衛門自伝』

築地小劇場は経済的に欠損であったが、劇団員は熱情をもって演劇を創る活動に努力をつづけていた。この影響は当然歌舞伎の中へも入ってきた。その中心は河原崎長十郎君だった。長十郎君も江戸っ子で、新富町に生まれ、大正二年に十二歳で初舞台というから、明治三五年生れで私より一年おそい生まれだ。・・・

長十郎君が十六歳の時、大正六年十一月九日に父の(河原崎)権之助氏は死んだ。・・・長十郎君は市村座のはからいで左団次一座に預けられたが、ほんとうは市村座の六代目菊五郎のもとへ預けられる話がきま

っていたし、本人も希望していた。とすればどうなっていたろうか、左団次一座へはいったために、小山内氏とも結ぶ。そのほか知名の文壇人と相識するようになって、長十郎君のもつ優れた才能に磨きがかけられていったことはたしかだった。小山内氏も六代目と結ぶ希望が強かったが、あまりにも封建的な周囲の事情で、かえって左団次氏と結ぶようになったとのことだった。

長十郎君は小学校では優秀な成績で、ずっと級長で通した。いま映画監督の滝沢英輔氏が同級で副級長であったそうだ。深く考える性質と、父を失って周囲の封建的なしきたりの中で育っていく独立生活は、彼もっている科学的な性格に矛盾して、なにか新しいものをつかまねば、の意気に燃えていた。

小山内先生に師事し、よく家へいって勉強していた。学生連中にも友人が多かった。土方与志氏もその友人の一人だった。小石川駕籠町の土方伯爵邸の地下室で、新劇の人たちと芝居をやったり、岩村和雄氏からダルクローズを習ったり、夜通し酒を飲み、新しい芸術とヨーロッパへの憧れに談論風発、青年たちと語り明かすのだった。

大正十三年の十月、築地小劇場でのゴーリキーの『どん底』に、長十郎君がは錠前屋のクレーシチの役で出演した。こうしてもっとも古い歌舞伎の伝統的な名門、河原崎家の一子は、最も新しい舞台に立って、感激のうちに新しい栄養を吸収していた。①

① 中村翫右衛門著『人生の半分―中村翫右衛門自伝』筑摩書房、一九五九年。下巻、一四一―一四二頁。

かく語る翫右衛門自身については、やがて歌舞伎の革新をめざす身でありながら、築地小劇場の創設にも新たな学芸の興隆にも当時眼を閉じていた。「おどろくことには」と彼は回顧する。「築地の芝居に全然無関心であったことだ。創立から一回も見えていないばかりでなく、小山内氏の葬儀のとき、はじめて築地小劇場の場所を知ったのだ。」「藤村・花袋・秋声などはちょっと眼を通して、わかりにくそうなので、手にとらなかつたし、一葉・二葉亭・独歩・鷗外すらも読まなかつた。私が築地へ近づかなかつた原因も、こういうところもひそんでいく。」①

他方『冬の宿』の女役としては、専属第一号の山本安英に加えて、花柳はるみや若宮美子など既成の俳優が補強される。大正六年民衆劇団の公演で注目されたのち、豊富な舞台経歴を経て花柳が、震災の翌年四月早稲田大學スコット・ホールにおける先駆座の興行で主演を果たしていた。旗揚げを挙行した中村屋土蔵劇場が焼失したため、秋田雨雀らはここに舞台を移し、柳瀬正夢がこれを補佐したのある。「驚くべき感激」と『秋田雨雀日記』で伝えられる。「アナトオル・フランスもよかった。『水車小屋』もよかった。言葉に非常な力が生まれてきた。ストリンデルベルヒの花柳君は実に立派だ。今夜はじつに愉快な力強さを感じた。」②

花柳はるみの俳優経歴（尾崎宏次著『女優の系図』）

① 同書、一〇五―一〇七頁。

② 『秋田雨雀日記』九九―一〇〇頁、三四三―三四五頁。

花柳はるみが島村抱月・松井須磨子らの芸術座に第一期研究生として入ったのは大正二年（一九一三年）であるが、芸術座の時代にはとくに目立った存在ではなかった。彼女の名が歴史的にしるされる最初は、「日本の映画劇の最初の烽火となった」（田中純一郎『日本映画発達史』、あの『生の輝き』と『深山の乙女』の主演女優としてである。映画女優の開拓者となったはるみは、その後青山杉作・村田実らの踏路社や秋田雨雀・佐々木孝丸らの先駆社などにでて、それから畑中蓼坡らの新劇協会で伊沢蘭奢とふたりで活躍する時期をへて、やがて発足する築地小劇場へはいつて、初期の大きな役々をこなすまで、かなり波乱にとんだ足あとを残した。はるみのそういう足跡を山本安英さんは、松井須磨子の死から築地小劇場の誕生までのあいだをつないでくれた大事な女優だ、といっている。はるみが生きた時代の多様な演劇集団は、できてはつぶれ、つぶれてはまたできるといような状態をつづけた。そのなかをはるみは泳ぎきったのである。・・・

芸術座で『モンナ・ワンナ』や『内部』の群衆に出たはるみは、大正六年に秋田雨雀を顧問として結成された民衆劇社でワイルド作『ウェーラ』五幕に出演してはじめて舞台女優として認められた。彼女がのちに先駆座に出た時から知って居る佐藤誠也氏は、芸術座以後のおもな彼女の足どりをつぎのように語った。「はるみは大正五年に山田耕筈、小山内薫、石井漠らの新劇場公演に一度だけ出た。石井漠は舞踊詩を踊った。場所は喫茶店メーゾン鴻ノ巣の四階である。はるみはシュニッツラーの『輪舞』にでた。大正六年には民衆劇社にでたあと、青山杉作らの踏路社公演に出た。演目は『春のめざめ』であった。さきに書いた映画出演のあと、大正七年には村田実らと黎明座をつくって赤坂の演技座でバーナード・ショーの『ウォーレン婦人の職業』に出た。大正九年には松竹蒲田の撮影所へ招かれて川田芳子、栗島すみ子らと映画にでる。同十一年には汐見洋らの研究座でストリンダベリーの『債鬼』やウェデキントの『地霊』のルル、チェホフ作『か

もめ』のイリーナなどに出演、十三年に先駆座の公演に参加してストリンダベリーの『仲間』に出演した。『永井荷風日記』第一巻の大正九年十月二六日のところを見ると（帝国劇場に研究座を見る。近來この種の演劇ほとんど数えるにいとまあらず）とされるされていて、新劇団の乱立が思われる。大正十三年の六月にできる築地小劇場の誕生がやがて彼女を迎えるのだが、そのあと大正十五年には畑中蓼坡らの新劇協会にでて伊沢蘭奢と共演したり、心座にでたり、前衛座の旗揚げ公演『解放されたドン・キホーテ』にも出演したのである。はるみの人気はいつも学生たちの間で評判が高かった。①

〔未完〕